

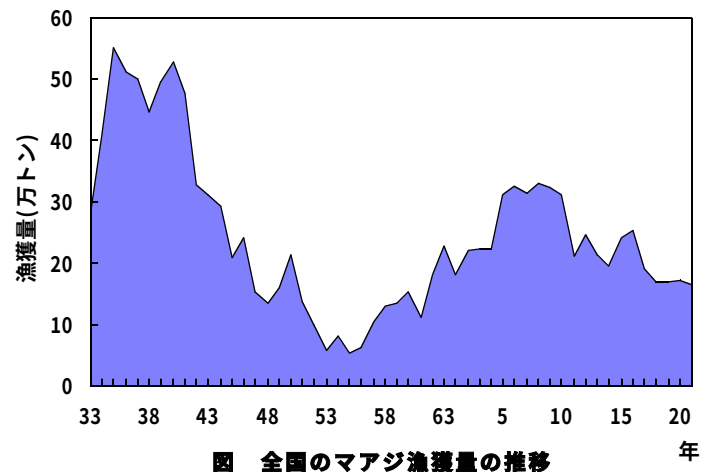
【漁況】

[マアジ]

1. 漁獲量の動向（農林統計）

全国のマアジの漁獲量は、昭和40年の53万トンにピークに減少傾向となり、昭和55年には5万4千トンとなりました。

その後増加傾向に転じ、平成8年には33万トンに増加し、平成10年までは30万トン台で推移しましたが、再び減少傾向に転じ、平成21年は16万6千トンとなりました。



2. 平成23年1～3月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域では、牛深沖，縄瀬沖，甕島東に漁場が形成されました。

薩南海域では、立目崎沖，開聞沖に漁場が形成されました。

4港計のまき網では、マアジ豆（1歳魚：平成22年生まれ）主体に710トンの水揚げがあり、前年の82%及び平年の55%となりました。

3. 平成23年4～6月期の見とおし

漁獲の主体は、マアジ豆・小（1歳魚：平成22年生まれ）でマアジ小・中（2歳魚：平成21年生まれ）も混じるでしょう。

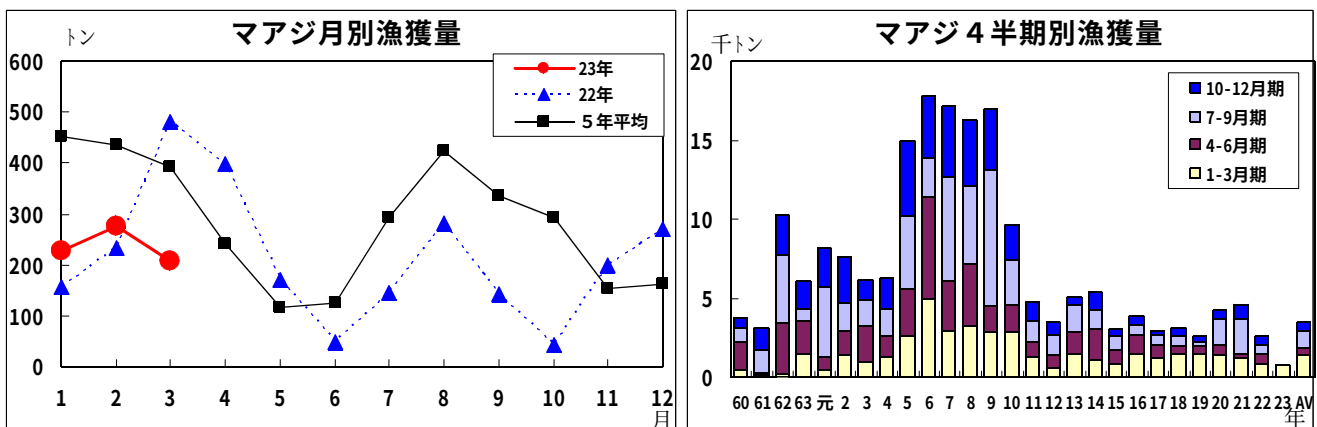
来遊量は、前年，平年を下回るでしょう。

（根 拠）

漁獲の主体と来遊量は、現在の漁況経過や近年の漁獲パターンから予測しました。

漁獲主体となるマアジ1歳魚は、まき網での漁況が低調に推移していることから、前年，平年を下回ると考えられます。マアジ2歳魚は、0歳での加入が良かった年級で1歳での漁獲も好調であったことから前年を上回ると考えられます。

総合的に判断すると、前年，平年を下回ると考えられます。

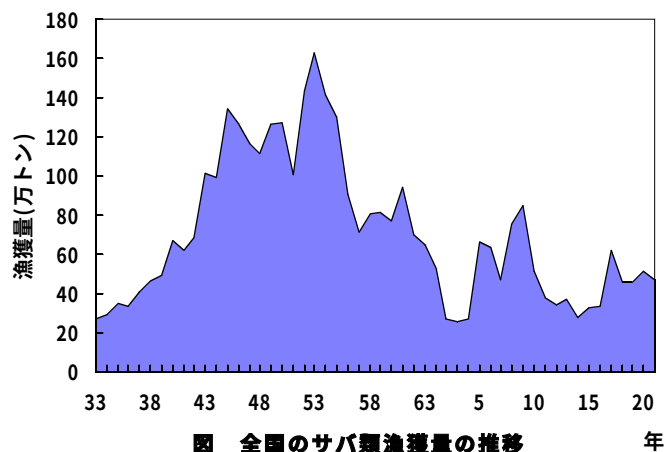


※ 平年値は過去5年（平成17～21年）の平均値(AV)，平成23年3月23日までの水揚げ量を使用。

[サバ類]

1. 漁獲量の動向（農林統計）

サバ類の漁獲量は、昭和53年の160万トン进行ピークにマサバ資源水準の低下により年々減少し、昭和57年には72万トンとなりました。その後は、ゴマサバの増加により大幅な漁獲量の減少は見られませんでした。昭和63年以降はゴマサバの資源水準も低下したため、サバ類の漁獲量は大きく減少し、平成3年には26万トンとなりました。平成5年から増加に転じ平成9年には84万9千トンまで増加しましたが、その後減少し平成14年は27万9千トンとなりました。平成17年から再び増加し平成21年は47万1千トンとなりました。



2. 平成23年1～3月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域では、牛深沖、縄瀬沖、甑島東に漁場が形成されました。

薩南海域では、宇治、馬毛島沖、内之浦沖に漁場が形成されました。

4港計のまき網では、ゴマサバ小、中小(2歳魚：平成21年生まれ)主体に6,790トンの水揚げで、前年の474%及び平年の175%と好調に推移しました。

3. 平成23年4～6月期の見とおし

漁獲の主体は、ゴマサバ小、中小(2歳魚：平成21年生まれ)となるでしょう。

来遊量は前年、平年を上回るでしょう。

(根拠)

漁獲の主体と来遊量は、現在の漁況経過や近年の漁獲パターンから予測しました。

ゴマサバ1歳魚は、若干の来遊がある程度と考えられます。ゴマサバ2歳魚は、加入豊度が高い年級群で今期も漁獲の主体として来遊し前年を上回ると考えられます。ゴマサバ3歳魚は、太平洋系群の加入状況が悪く若干の来遊がある程度と考えられます。ゴマサバ4歳魚は、産卵親魚群として来遊し、前年を上回ると考えられます。

総合的に判断して、前年、平年を上回ると考えられます。

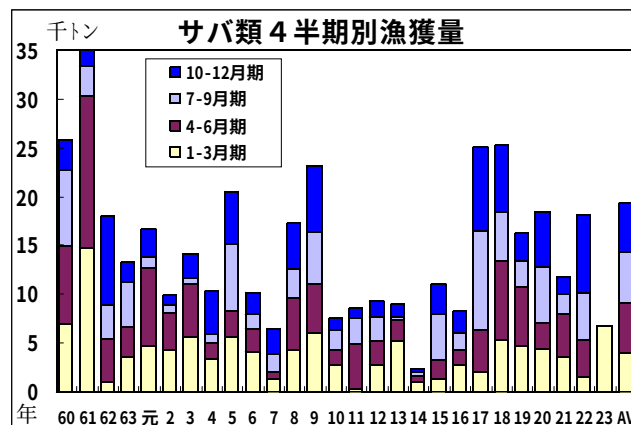
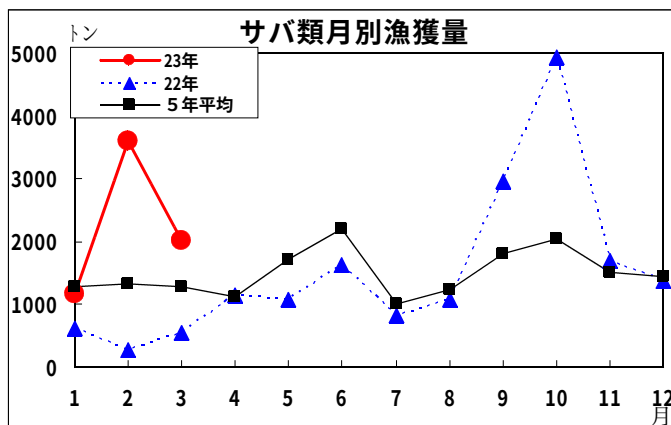


図 サバ類まき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年（平成17～21年）の平均値(AV)、平成23年3月23日までの水揚げ量を使用。

[マルアジ（アオアジ）]

1. 漁獲量の動向

マルアジの漁獲量は、昭和62年から平成元年に1,500トンを超えるピークがあり、その後低調に推移し、平成12年から15年に再度ピークを迎え15年には3,150トンと最高を記録しました。平成16年以降は低調に推移し、21年は過去最低の94トンとなりましたが、22年は増加し平年並みの371トンとなりました。

2. 平成23年1～3月期の漁況の経過

野間池沖が漁場となり、期全体で157トンの水揚げで、前年の152%及び平年の110%でした。

3. 平成23年4～6月期の見とおし

漁獲の主体は、マルアジ小（2歳魚：平成21年生まれ）でしょう。

来遊量は前年並で、平年を上回るでしょう。

（根 拠）

漁獲の主体と来遊量は、現在の漁況経過や近年の漁獲パターンから予測しました。

マルアジ小(2歳魚)の来遊は、前年並みで低水準の平年を上回ると考えられます。

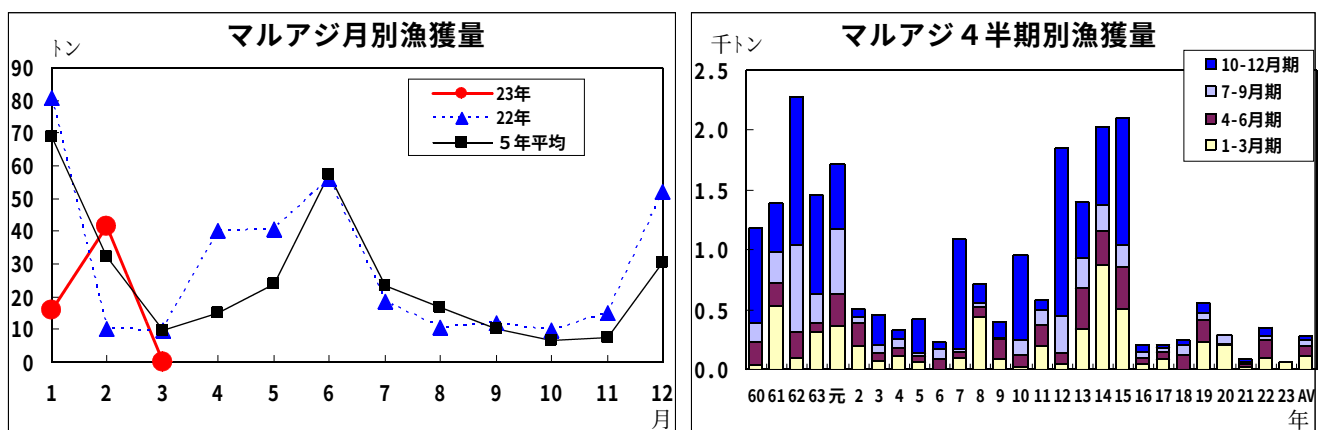


図 マルアジ（アオアジ）まき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年（平成17～21年）の平均値(AV)、平成23年3月23日までの水揚げ量を使用。

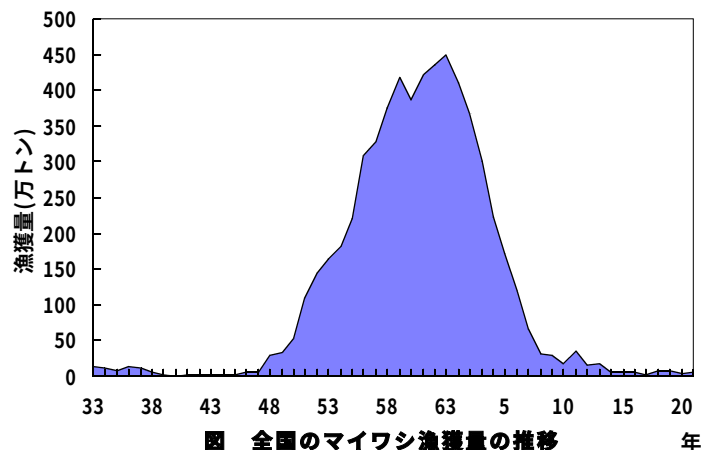
[マイワシ]

1. 漁獲量の動向（農林統計）

全国のマイワシの漁獲量は，昭和30年代から40年代にかけての不漁期の後，昭和48年頃から増加の傾向が見られ，昭和63年には449万トンまで増加しました。

しかし，平成元年から三陸沖を中心に漁獲量が減少し始め，その後もマイワシの若齢魚の減少等により，全国的に漁獲量は減少を続け，平成7年には66万トン，平成10年は16万7千トンとなりました。

その後さらに減少し平成14年は5万トンとなり，以降横ばい傾向で平成21年は6万1千トンとなっています。



2. 平成23年1～3月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域のまき網では甌島東でウルメイワシに混じって漁場が形成されました。薩南海域のまき網では野間池沖でウルメイワシに混じって漁場が形成されました。北薩海域の棒受網では，漁獲がほとんどありませんでした。

4港計のまき網では中羽(1歳魚：平成22年生まれ)主体に大羽(2歳魚以上)混じりで212トンの水揚げで前年の742%，平年の277%となりました。北薩海域の棒受網は，2.5トンの水揚げで前年の5%，平年の15%となりました。

3. 平成23年4～6月期の見とおし

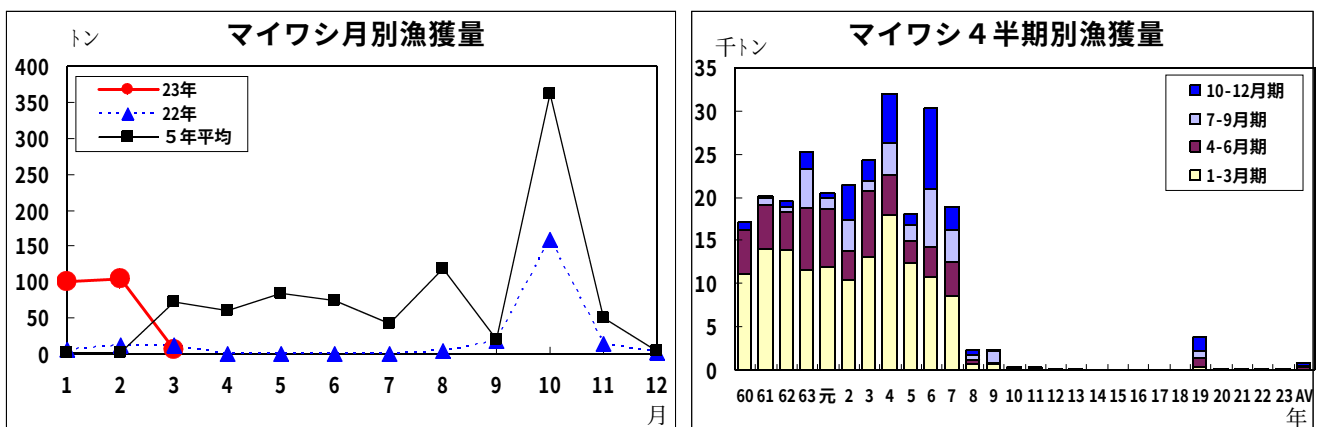
漁獲の主体は，中羽(1歳魚：平成22年生まれ)でしょう。

来遊量は前年を上回って，平年を下回るでしょう。

（根 拠）

漁獲の主体と来遊量は，現在の漁況経過や近年の漁獲パターンから予測しました。

今期は現在の漁況が継続すると考えられます。ウルメイワシに1歳魚(平成22年生まれ)主体で2歳魚(平成21年生まれ)が混獲される程度と考えられます。



※平年値は過去5年（平成17～21年）の平均値(AV)，平成23年3月23日までの水揚量を使用。

[ウルメイワシ]

1. 漁獲量の動向（農林統計）

全国のウルメイワシの漁獲量は、昭和30年代後半から40年代前半にかけて3万トン前後で推移していましたが、昭和46年から54年まで5万トン前後で推移しました。昭和55年以降、漁獲量は減少し昭和60年には3万トンとなりました。その後、増減を繰り返しながら増加傾向を示し、平成6年に6万8千トンとなりました。その後減少傾向に転じ、平成12年は2万4千トンとなりましたが、近年は増加傾向となり、平成21年は5万3千トンでした。

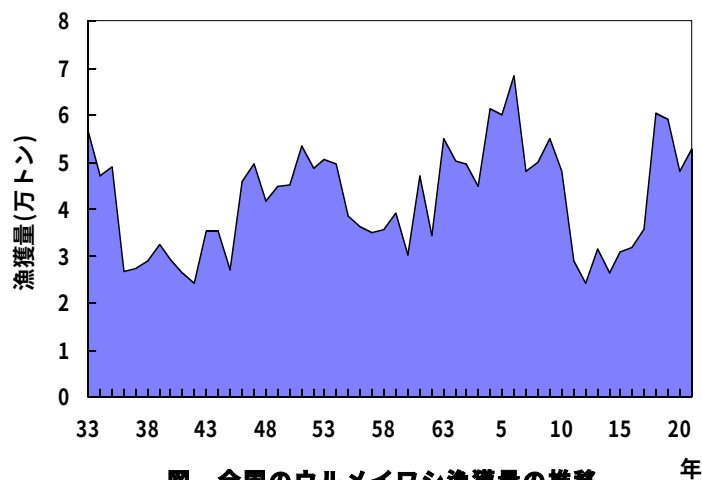


図 全国のウルメイワシ漁獲量の推移

2. 平成23年1～3月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域では、甌島東に漁場が形成されました。

薩南海域では、宇治と枕崎沖～野間池沖に漁場が形成されました。

4港計のまき網では、大羽(1歳魚：平成22年生まれ)主体に1,760トンの水揚げがあり、前年の223%，平年の329%となりました。北薩海域の棒受網では、大羽(1歳魚：平成22年生まれ)主体に91トンの水揚げがあり前年の24%，平年の63%となりました。

3. 平成23年4～6月期の見とおし

漁獲の主体は、大羽(1歳魚・平成22年生まれ)になるでしょう。

来遊量は前年，平年を上回るでしょう。

(根 拠)

漁獲の主体と来遊量は、現在の漁況経過や近年の漁獲パターンから予測しました。

今期は、1歳魚(平成22年生まれ)主体に2歳魚(平成21年生まれ)混じりで来遊があります。前年の9月以降1歳魚(平成22年生まれ)主体に好調な来遊があったことから、今期も1歳魚主体に前年，平年を上回る来遊が見込まれます。

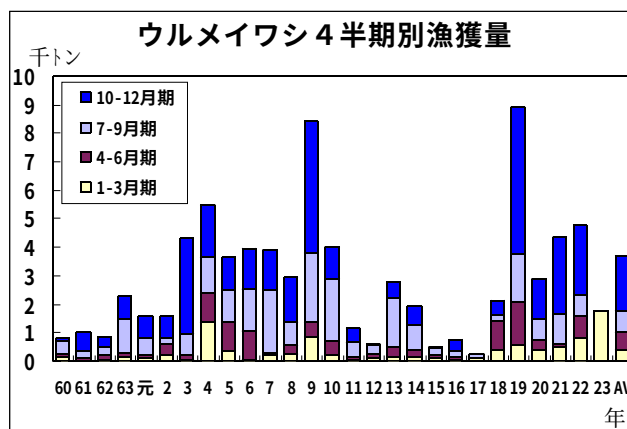
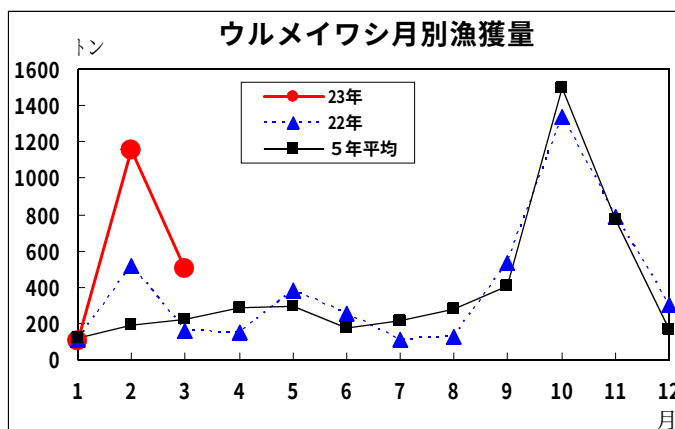


図 ウルメイワシまき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年（平成17～21年）の平均値(AV)，平成23年3月23日までの水揚量を使用。

[カタクチイワシ]

1. 漁獲量の動向（農林統計）

カタクチイワシの漁獲量は、昭和48年まで30万トン台で変動していましたが、昭和49年以降減少傾向となり昭和54年には13万トンとなりました。その後、徐々に漁獲量は増加し昭和59年には22万トンとなりましたが、昭和62年には再び14万トンまで減少しました。昭和63年以降は大きく増減を繰り返し、平成13年は30万トン、平成14年は44万トンでした。平成15年は過去最高の53万5千トンとなりましたが、その後減少傾向に転じ、平成21年は34万5千トンとなりました。

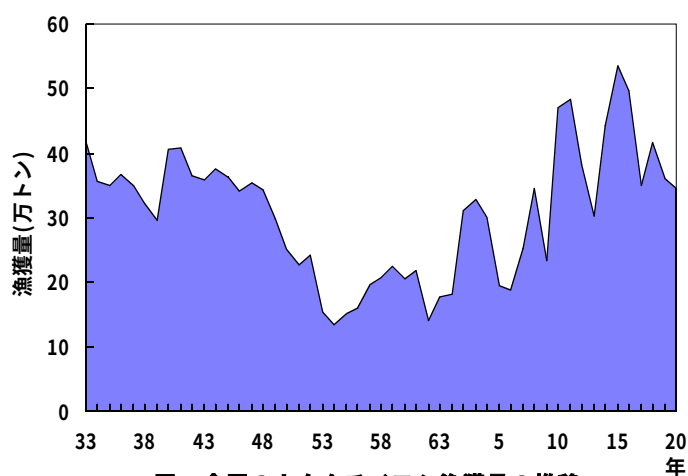


図 全国のカタクチイワシ漁獲量の推移

2. 平成23年1～3月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）のまき網及び棒受網】

鹿児島県4港のまき網では1.5トン（前年比0.3%, 平年比0.2%）と前年・平年を大幅に下回り、北薩海域の棒受網では77トン（前年比86%, 平年比49%）と、前年・平年を下回りました。

3. 平成23年4～6月期の見とおし

期間の前半は大羽銘柄(1歳魚・平成22年生まれ)が漁獲の主体で、後半は小中羽銘柄(0歳魚・平成23年生まれ)が漁獲の主体となり、来遊量は前年・平年を下回るでしょう。

（根 拠）

年明け以降の大羽群の来遊が低調に推移したことから、今期の漁獲の主体となる1歳魚、0歳魚の来遊水準は低いと考えられます。

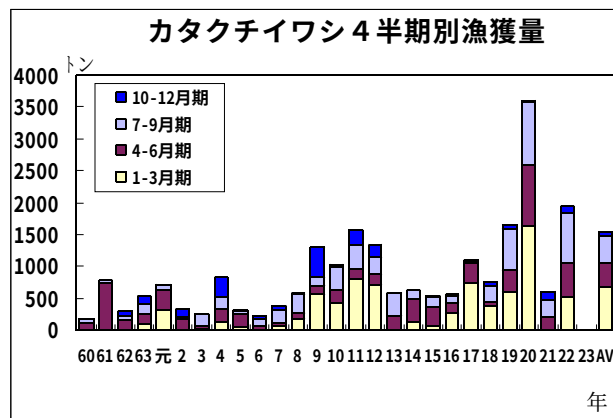
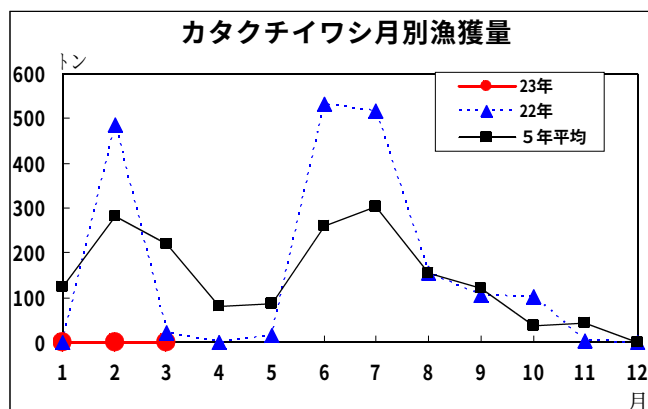


図 カタクチイワシまき網漁獲量変化(4港計)

※ 平年値は過去5年（平成18～22年）の平均値(AV)、平成23年3月23日までの水揚げ量を使用。

[イワシ類参考資料]

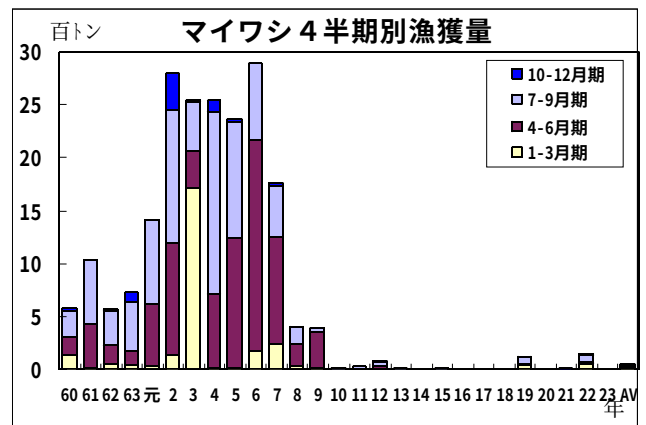
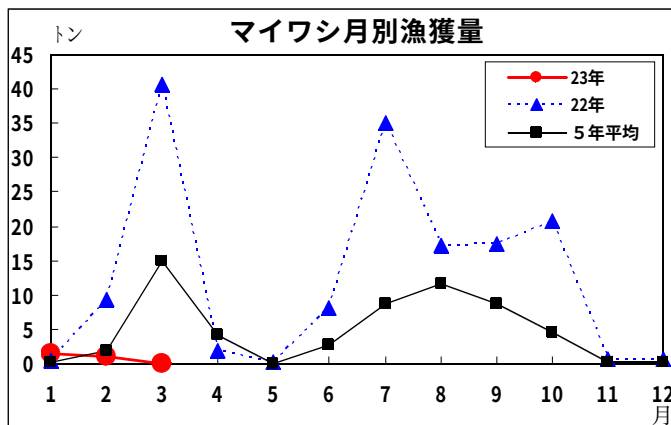


図 マイワシ敷網漁獲量変化(阿久根港)

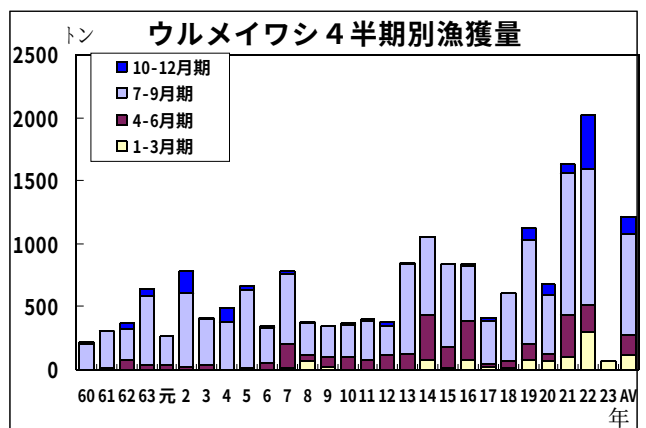
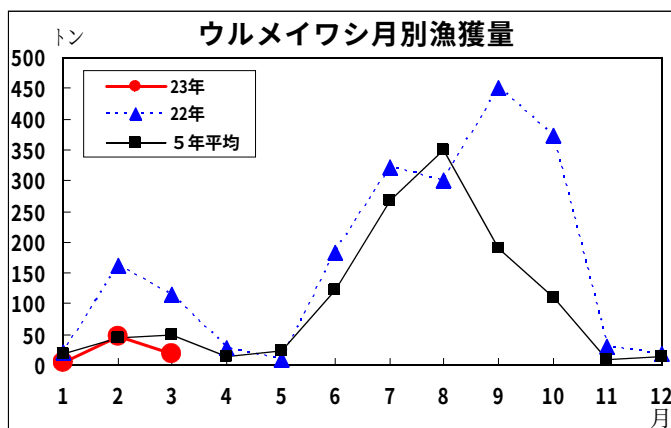


図 ウルメイワシ敷網漁獲量変化(阿久根港)

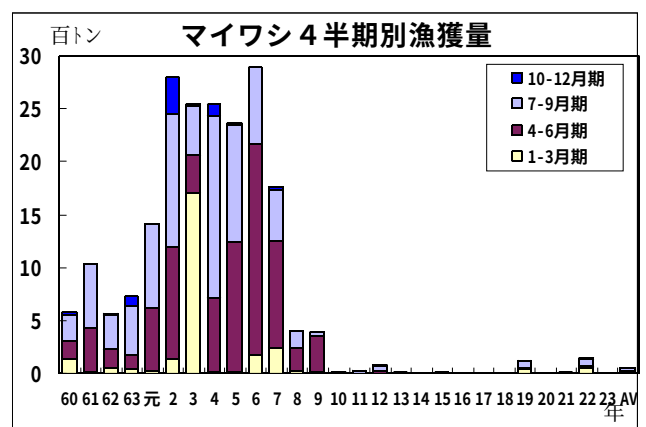
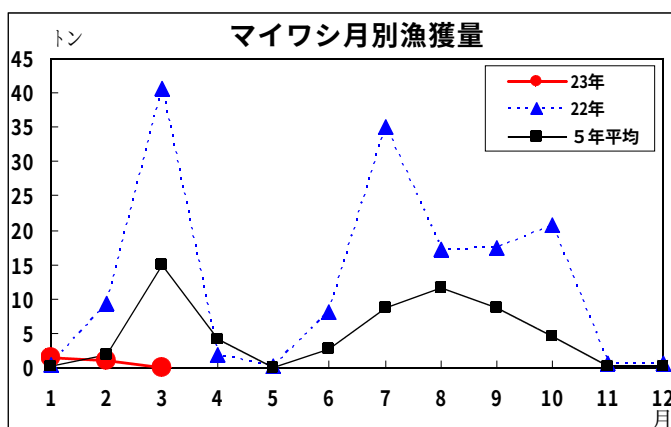


図 カタクチイワシ敷網漁獲量変化(阿久根港)

※ 平年値は過去5年（平成17～21年）の平均値(AV)，平成23年3月23日までの水揚量を使用。

[参考：漁況経過のみ記載]

〈ムロアジ類（クサヤモロ、モロ）（4港計）〉

1. 経年変化及び平成22年10～12月期の漁況の経過

ムロアジ類の漁獲量は、平成2年の21,700トン进行ピークに急減し、平成6年以降は、1,500トンから4,500トンの間での推移となっています。平成22年は2,185トンとなりここ5年間横ばいとなりました。

平成23年1～3月は、薩南海域では、種子島北、宇治に漁場が形成されました。期全体で536トンの水揚げで、前年の66%及び平年の101%となりました。

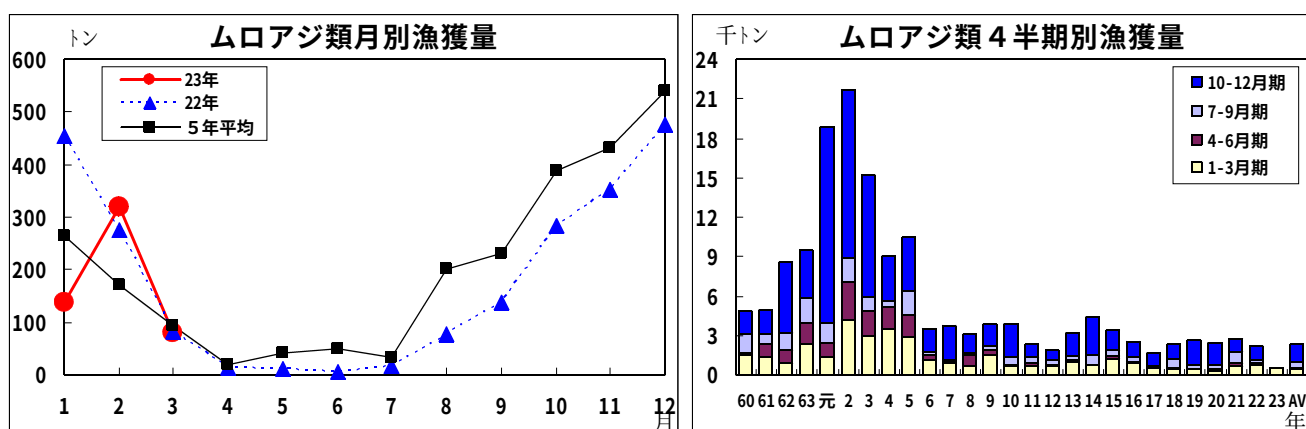


図 ムロアジ類まき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年（平成17～21年）の平均値(AV)，平成23年3月23日までの水揚量を使用。

〈オアカムロ（4港計）〉

1. 経年変化及び平成23年1～3月期の漁況の経過

オアカムロの漁獲量は、平成元年の5,300トン进行ピークに一端減少し、平成7年に4,400トンと再度ピークを迎えた後は減少傾向となっていました。平成20年は2,291トンと一端増加しましたが、再び減少傾向で平成22年は882トンとなりました。

平成23年1～3月は、薩南海域ではまとまった漁場が形成されず、ゴマサバに混じって漁獲され164トンの水揚げで前年の38%及び平年の30%となりました。

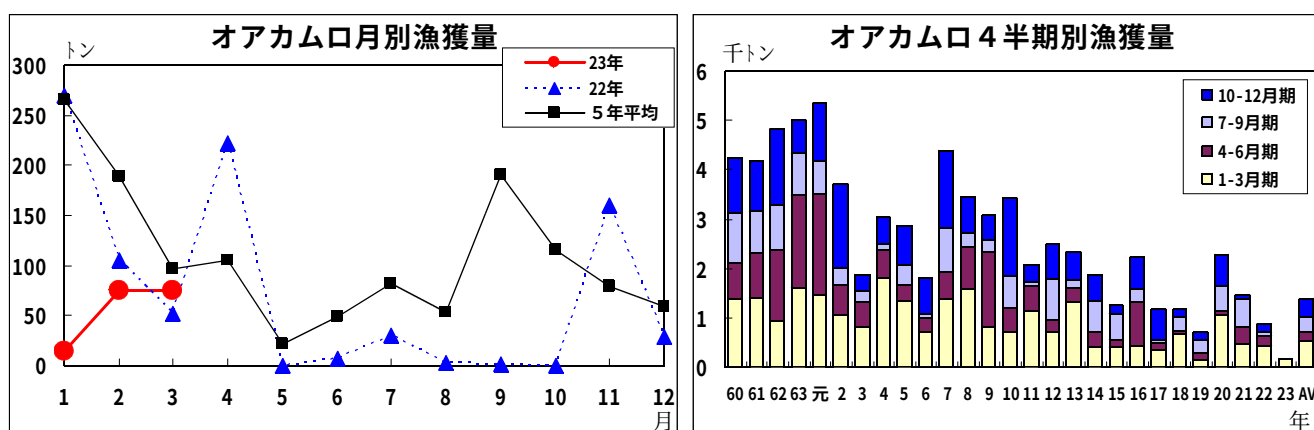


図 オアカムロまき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年（平成17～21年）の平均値(AV)，平成23年3月23日までの水揚量を使用。